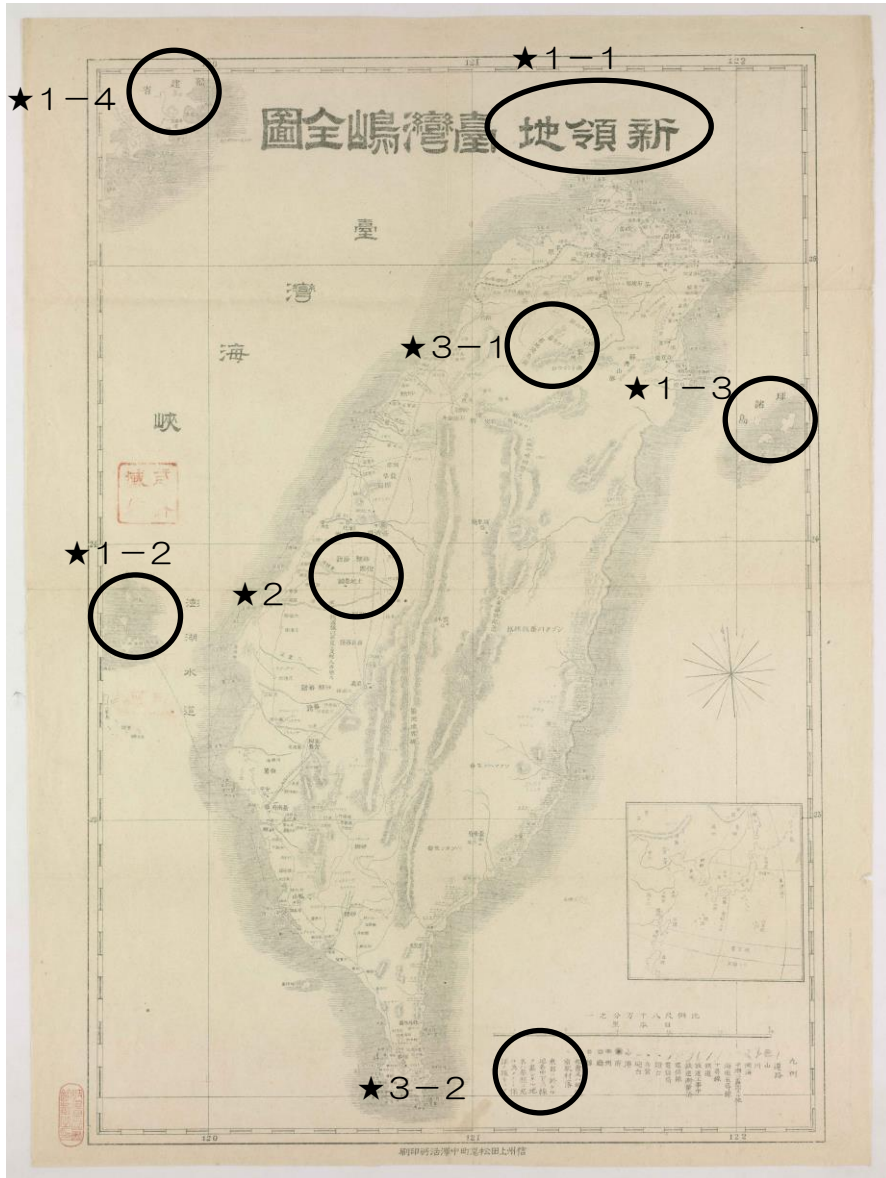


授業で使える当館所蔵地図

No. 36 『新領地台湾嶋全図』

作成年：1895（明治28）年～1900（明治33）年 サイズ：54×40cm 作者：中澤活版印刷（版）



★1-2



★1-3



★1-4



★2



★3-1



タンゴウ生蕃

蕃地境界線

【解説】

1895年の下関条約の結果、日本は遼東半島、台湾、澎湖諸島を領有することとなった。その後、三国干渉の結果、遼東半島を清に返還した日本政府は、台湾の統治に力を注いだ。本地図は、新たな領土である台湾の各都市や港の位置、交通網、山脈・河川・湖海などの自然環境が詳しく記されている。台湾に関する同様の地図は、この時期に数多く作成されており、当時の人びとの関心の高さが伺える。1895年から1945年まで約50年間にわたる日本の台湾統治の初期段階を知るうえで興味深い地図である。

【地図を見るポイント】

★1 「新領地」

地図中、台湾の西側には、同じく日本領となった澎湖諸島（★1-2）が記載されており、東側には琉球諸島の一部（★1-3）が記載されている。台湾・澎湖諸島は、琉球諸島（沖縄県）と同様に日本の領土であるという当時の人びとの認識が伺える。また、当時、中国大陸で日本の勢力圏となりつつあった福建省（★1-4）も左上に記載されており、当時の日本の領土的野心が垣間見える。

台湾総督府による統治は1895年から始まり、台湾総督樺山資紀が、島民の抵抗を武力で鎮圧した。台湾征服戦争での日本軍の戦死者は1988人にのぼり、日清戦争の戦死者（1161人）を上回った。

★2 台湾の「資源」への関心

地図を詳しく見ると、台湾の各地域でとれる特産物や資源、土地の状況などが記載されている。例えば、★2では、「砂糖」、「蕃諸」（さつまいも）、「橙園」（みかん園）などの記載が見られる。また、「土地豊饒」といった記載も見え、耕地に適しているかどうかを知りたいという関心も伺える。台湾全土で見ると、①全域で砂糖の記載が多い、②平野部で米の記載が多い、③山間部で茶、樟脳、石炭の記載が多く、硫黄の記載もあることが分かる。ちなみに、日本統治時代における台湾の最も重要な輸出品は砂糖で、1940（昭和15）年には、113万2768トンが輸出されていたという。

★3 「蕃地境界線」と東台湾

地図全体を見ると、島の西部には都市や地名が多く、交通網が発達している一方、東部には空白部分が多い。台湾中央部には、3000mをこえる山脈が南北に連なり、東部は開発が進んだ西部と分断されており、詳細な情報がこの段階で地図製作者に十分に入っていなかったことが分かる。★3-2では、「東部ニ於ケル地名中、下ニ線ヲ畫シタル地名ハ参照ニ充ル為メノミ、保証ノ限りニアラス」とある。戦前は日本の領域内で最高峰であった新高山（3952m）もこの地図には記載されていない。

★3-1では「蕃地境界線」と点線が記載され、その右側には「タンゴウ生蕃(ヤバウ)」と記載されている。「生蕃」とは、清朝時代の台湾原住民の呼称である。地図中には、「シブクーン蕃族」「ソアマハン生蕃」「バンタン生蕃」の記載が見られる。1941（昭和16）年当時、台湾には東部を中心に約16万人の原住民が暮らしていた。日本の台湾統治に対する原住民の抵抗は激しく、東部の開拓は大きな課題であったことが分かる。

【授業での利用例】

○下関条約で日本が獲得した領土を知ることができる（『日本史』『日清戦争』）。

- 「日清戦争と三国干渉」台湾・澎湖諸島の位置、島内の地理を地図上で確認することができる。
- 日本が勢力範囲に設定した福建省の記載から、「中国分割」に関連させて教えることができる。

○当時の台湾の特産品、産業の発展を考察することができる（『日本史』『日本の植民地支配』）。

- 生徒に地図中から台湾の特産品を読み取らせ、特に砂糖が多いことに注目させる。
- 台湾製糖会社の設立（1900年）とも関連させ、台湾産砂糖が大量に国内販売され、価格が低くなり、「すき焼き」が甘くなったことを紹介する。

○台湾の原住民と日本との関わりについて知るきっかけとなる。

- 1871（明治4）年、台湾南東部に漂着した宮古島島民を原住民が殺害した出来事（琉球漂流民殺害事件）から日本の台湾出兵に至るまでの理解を深める（『日本史』『明治初期の対外関係』）。
- 太平洋戦争で日本軍として台湾の原住民が戦い、密林地帯で戦果をあげたことを学ぶ（『日本史』『太平洋戦争』）。

【当館所蔵関連地図】

- ・「蕃族分布図」
- ・「台湾全図」

【参考資料】

- ・片倉佳史『台湾 日本統治時代の50年』祥伝社、2015年
- ・山口政治『知られざる東台湾』展転社、2007年